

# 奈良豆比古神社の仮面群について

大河内智之・松本るい

はじめに

- 一 仮面の基本情報
  - 二 仮面群の調査成果
  - 三 仮面群の調査成果
  - 一 新たに見いだされた翁・三番叟の作者銘について
  - 二 面裏の番号について
  - 三 仮面群の分析とその形成過程
  - 一 翁系面について
  - 二 猿楽面（能面・狂言面）について
  - 四 奈良豆比古神社の仮面群と長命猿楽
  - 一 面打「ダンマツマ」推定仮面の比較検討
  - 二 仮面群の形成と長命猿楽
- おわりに

はじめに

奈良市奈良阪町の奈良豆比古神社では、毎年一〇月八日の秋祭り宵宮に地域住民によって翁舞が奉納される。三人の翁が同時に舞う特徴的な翁三人舞の芸

態で知られており、その詞章とともに大和地方の神事における翁舞のあり方を考える上での重要な手がかりとして注目され<sup>①</sup>、平成一二年（二〇〇〇）に重要無形民俗文化財に指定されている。

同社にはこの翁舞で用いられる翁系面四面をはじめとする計二〇面の中世仮面が伝来しており、中でも応永二〇年（一四一三）、千草左衛門大夫作の銘を有する癒見は、製作時期と作者が判明する基準作例であるとともに、鬼神面の形成期の様相を伝えるものとして令和二年（二〇二〇）に単独で重要文化財に指定された。

これまでこの癒見面が特に注目され、早くから紹介されてきたが<sup>②</sup>、ただし二〇面全ての基礎的な情報は、いまだ十分に共有されていない状況にある。本稿では、奈良地域においてまとまった数を伝える当仮面群の重要性を鑑み、令和四年に同社及び奈良豆比古神社翁舞保存会の高配を得て調査を行った成果について紹介するとともに、これら仮面群の歴史的意義について、特にその形成過程に着目して若干の考察を行いたい。

なお各章執筆は、はじめに、一章、二章一節、三章、おわりにを大河内が、二章二節、四章を松本が分担し、全体を大河内が統括した。また図版については稿末にまとめて掲載しているので参照されたい。

## 一 仮面の基本情報

### 1 翁(白色尉) 一面

【法量】面長 二〇・六cm 面幅 一五・五cm 面奥 八・五cm

【形状】冠(烏帽子)をわずかに彫りくぼめて表す。額の皺は中央で強く下方にうねる。両目はなだらかなへの字形で笑相を表し、切顎として、上歯二本、顎髭を表す。

【品質・構造】針葉樹を用い、材の厚みは大きい。切顎とし、上下の部材は麻紐で結ぶ。顎髭を植える(二段)。眉は亡失し、貼り付けた痕跡を残す。胡粉下地を施して彩色仕上げとする。下地と彩色は二層あり、下層の下地は不明で、やや灰色がかった彩色と、一部に墨が確認できる。上層は胡粉下地を施して彩色仕上げ。冠は黒漆、唇に朱を施す。眉間、左目尻、口唇上部、鼻に剝落がある。面裏は墨塗として、スレにより一部素地を呈す。下顎の中心に小孔がある。

【銘記】面裏額部墨書「万借作」

【備考】室町時代。三番叟(7)と作風が共通する。

### 2 翁(白色尉) 一面

【法量】面長 一七・三cm 面幅 一四・六cm 面奥 八・三cm

【形状】幅の広い冠(烏帽子)が中央でたわみ、左右の縁で下方に大きく巻きこむ。への字形の両目はやや強めに曲がって笑相を表す。目尻から流れる皺が立体的に重なり、額の皺へと大きく曲がってつながる。切顎とし、上歯二本、下歯一本を表し、口唇は上下とも突き出すようにやや反って、顎髭を表す。

【品質・構造】広葉樹を用い、材はやや厚い。切顎とし、上下の部材は麻紐で結び(顎部材向かって左側は紐穴を二か所にうがつ)、顎髭を植える。表面は

胡粉下地を施して彩色仕上げとする。冠は黒漆、唇に朱を施す。鼻先、唇などに剥落がある。面裏は墨塗とする。

【銘記】なし。

【備考】室町時代。三番叟(6)と作風が共通する。

### 3 翁(白色尉) 一面

【法量】面長 一八・五cm 面幅 一三・六cm 面奥 七・八cm

【形状】冠(烏帽子)下縁は中央でややたわむ。額の皺はうねり少なく上下に均等に多数あらわす。眉を毛描きし、両目は中央頂点で尖り左右に直線的に広がるへの字形として笑相を表し、下脛は目尻に向かってわずかにうねる。下脛は抑揚のない板状を呈する。切顎として、上歯二本、下歯一本を表し、人中を丸く刻んで、顎髭をあらわす。

【品質・構造】広葉樹を用い、材の厚みは薄い。切顎とし、上下の部材は別材製として、麻紐でつなぎ、顎髭を植える。胡粉下地を施して彩色仕上げとし、冠は黒漆、目の輪郭に墨、眉と口髭及び髪は朱線で毛描きする。面裏は墨塗りとす。

【銘記】なし。

【備考】室町時代。三番叟(7)と作風が共通する。

### 4 翁(白色尉) 一面

【法量】面長 一八・三cm 面幅 一五・九cm 面奥 七・四cm

【形状】冠(烏帽子)は刻出せず、なだらかに円弧状に墨塗で表す。眉は別材製(亡失)で貼り付けた痕跡を残す。上脛が深く眼窩に窪み、両目はなだらかなへの字形として笑相を表す。鼻梁は細く尖り、鷲鼻とする。切顎として、上歯二本、下歯一本をわずかに表し、幅の広い下唇が強調される。顎には皺を表

さない。顎髭を表す（亡失）。

【品質・構造】広葉樹を用い、材の厚みは薄い。切顎とし、上下の部材は現状麻紐で結ぶ。顎の植毛部分は横長の四角形の孔を刻み、内部両端に貫通孔を設ける。その上方に竹釘で植毛を固定した痕跡が見える。胡粉下地を施して彩色仕上げとし、冠はやや光沢のある墨、唇に朱を施す。面裏は全面黒漆塗りとする。面裏額部に縦長の長方形のわずかな窪みがある。

【銘記】右耳紐孔部紙縫墨書「能面／第式號／奈良豆比古神社（朱印）」。

【備考】南北朝～室町時代

5 三番叟（黒色尉） 一面

【法量】面長 一八・〇cm 面幅 一四・一cm 面奥 七・八cm

【形状】冠（烏帽子）は明確には表さない。眉を植え、への字形の両目はやや強く曲がって笑相を示し、下脛は平坦な板状を示す。上歯二本を表し、下歯は歯の形にくぼむ。切顎とし顎髭（亡失）を表す。

【品質・構造】針葉樹を用い、材の厚みはやや大きい。眉に植毛孔を左右各三か所に穿ち、一部に植毛を残す。切顎とし、紐孔は上顎のみ三ヶ所ずつ穿ち、上下の部材は麻紐で結ぶ。顎髭を植える孔を八か所穿つ。耳部の紐孔も二カ所（右側の穴一つは木で埋める）に穿つ。白下地を施して、黒漆塗にて仕上げ、唇に朱を差す。面裏は墨塗として、額や頬は擦れにより素地を見せる。顎部材の左端を欠損する。

【銘記】面裏眉間部墨書「康吉」、面裏右頬部墨書「二」

【備考】室町時代

6 三番叟（黒色尉） 一面

【法量】面長 一六・六cm 面幅 一四・四cm 面奥 七・〇cm

【形状】幅の広い冠（烏帽子）が中央でわずかに下にたわみ、左右の縁で下方に巻きこむ。両目をへの字形として笑相を表し、上脛のふたえの刻線が皺につながる額へと大きく曲がる。切顎とし、上歯四本と舌を表し、口髭、顎髭を表す。

【品質・構造】広葉樹を用い、材の厚みはやや大きく、表面は鑿目を荒く仕上げ。切顎とし、上下の部材は糸で括り、口髭の植毛孔一〇か所、下唇の下に一か所、顎に四か所の植毛孔を設ける。表面は胡粉下地を施して黒漆塗仕上げとする。唇に朱を施す。鼻先、顎先、右紐穴付近などに虫損が生じる。面裏は墨塗とする。古い面紐を残す。

【銘記】面裏右頬部墨書「十五」、右耳紐孔部紙縫墨書「能面／第伍号／奈良豆比古神社（朱印）」

【備考】室町時代。翁（2）と作風が共通する。

7 三番叟（黒色尉） 一面

【法量】面長 一五・二cm 面幅 一三・七cm 面奥 七・八cm

【形状】冠（烏帽子）は明確には表さない。額の皺はうねり少なく上下に均等に多数あらわす。眉を毛描きし、両目はそれぞれ目尻を吊り上げて厳しい表情とし、下脛中央付近でややうねる。切顎として、上歯二本を表す。人中をわずかに丸く刻む。口髭を毛描きする。

【品質・構造】広葉樹を用い、材の厚みはやや厚い。切顎とし、顎材を結びつける紐孔を左右二か所に穿つ。表面は胡粉下地を施して墨塗とし、眉・口髭を描く。唇に朱を施す。面裏は墨塗とする。顎部材を亡失し、鼻先に剥落がある。

【銘記】右耳紐孔部紙縫墨書「能面／第拾六号」

【備考】室町時代。翁（3）と作風が共通する。本来は父尉面であったか。

8 尉 一面

【法量】面長 二一・四cm 面幅 一五・三cm 面奥 八・二cm

【形状】髪を植え、眉を寄せて眉間に皺を表し、目はわずかに笑相とする。眉、口髭を毛描きし、耳を表す。老瘦により頬骨を露わにし、頬も瘦せが強調されてやたるみ、縦に皺を刻む。わずかに開口して上下の歯を見せ、墨塗する。顎髭を植える。

【品質・構造】針葉樹（桧）を用いる。頭上と額左右に頭髪を植毛し、顎髭を植える（亡失）。胡粉下地を施し彩色仕上げとし、眉、口髭は毛描きする。面裏は素地仕上げ。額右上部と、右耳半ばから顎までを割損する。

【銘記】面裏右頬部墨書「八」、左耳紐孔部紙繕墨書「能面／第八号／奈良豆比古神社（朱印）」

【備考】室町時代〜桃山時代。中将（15）と用材の特徴や面裏の処理がよく一致する。

9 尉 一面

【法量】面長 二一・二cm 面幅 一四・九cm 面奥 九・二cm

【形状】髪を植え、眉を寄せて眉間に皺を表し、両目は目尻・目頭とも下方に下がって笑相を強調する。眉を毛描きし、耳を表す。老瘦により頬骨を露わにする。開口の度合いが大きく、上下の歯を見せ、墨塗する。口髭、下唇の下、顎に植毛する（亡失）。

【品質・構造】針葉樹（桧）を用いる。面の中央と、両こめかみから耳を含む左右の部材と、顎の両脇部分をそれぞれ別材製とし、接続部は布貼して補強する。瞳孔は四角形とする。頭上と額左右に頭髪を植毛し、顎髭を植える（亡失）。胡粉下地を施して彩色仕上げとし、眉、口髭は毛描きする。面裏の口の右端に木尿及び布貼を施し、左頬一部と顎の脇部分に材の補強のため紙貼りして、全

体を黒漆仕上げとする。

【銘記】面裏額部金泥銘「長命／次郎大夫」、面裏右頬部墨書「二十〇」、左耳紐孔部紙繕墨書「能面／第参号／奈良豆比古神社（朱印）」

【備考】室町時代〜桃山時代

10 癒見 一面

【法量】面長 二一・二cm 面幅 一五・七cm 面奥 八・〇cm

【形状】頭頂に冠を表し、額にほつれた毛髪を表す。額中央に瘤を作り、眉根を寄せて眉間にX字状に皺を表して、眉尻は下方へ強く下がる。両目を見開きつつ目尻をやや下げ、下瞼がややうねる。耳を表さない。頬骨が飛び出て、口をへしめて口端に皺が寄る。口髭、顎髭を表す。

【品質・構造】針葉樹の一枚製とし、やや厚みを残し平滑に彫る。縁にやや厚みを持たせて、面を取って丸みを帯びさせる。左眉根を通る線で頭頂から目頭付近までが割損し、一部木尿漆にて埋める。頭頂やや左から左目中央に至る線で割損し、一部木尿漆を施し、表裏とも紙貼（幅1cm程度）を施し補強する。眼に鍍金を施した銅板（一部緑青が発生する）を嵌入し、瞳は割り抜く。瞳孔は円形。金属板の目尻・目頭に朱をのせる。下地と彩色は三層あり、初層は白下地に丹（濃い赤色）を施す。第二層は額・眉・鼻・頬の稜線、顎下に茶褐色のつやのある彩色を施すが、面全体には及んでおらず、部分的な補彩とみられる。最も表面の第三層は、胡粉下地にやや暗い肌色を塗り、冠、髪、眉、口髭・顎髭を墨描きする。眉間のしわ、眼の周囲、鼻口の周囲、唇に朱を施して隈とする。面裏は黒漆塗りとし、縁部は摩耗して素地を見せる。なお面裏の黒漆については、鼻孔の漆の上層に朱（表面から続いたもの）が見えることから、第三層の彩色以前に漆が塗られていることがわかる。

【銘記】面裏刻銘「千草左衛門大夫作／応永／廿季／二月／廿一日」、右耳紐

孔部紙縫銘記「能面／第壹号／奈良豆比古神社（朱印）」

【備考】室町時代・応永二〇年（一四一三）。重要文化財（令和二年三月一九日指定）

11 怪士 一面

【法量】面長 二一・三 cm 面幅 一三・九 cm 面奥 七・二 cm

【形状】冠を表して、眉尻は吊り上がる。眼窩はやや窪み、目を菱形にして目尻があがる。開口し上下の歯を表す。口髭、顎髭をあらわす。

【品質・構造】針葉樹（桧）を用い、現状額の左側より頬の外側までを割損する。右は額右側より顎脇まで割損する。額の左右に鉢巻止めの突起を設ける。胡粉下地を施し彩色仕上げとする。瞳に金具を嵌入（亡失）し、その周囲に朱を施す。瞳孔は丸形。歯は黒色を施し先端のみ金泥を重ねる。面裏は素地とする。

【銘記】面裏右頬部墨書「二十四」、付箋あり

【備考】室町時代／桃山時代

12 般若 一面

【法量】面長 二一・六 cm（角先を含む面長二六・〇 cm）  
面幅 一六・六 cm 面奥 一〇・二 cm

【形状】頭部左右に角を表し、髪を中央で左右に分け、乱れ髪を額に表す。眉根を強く寄せつつ目を見開き、小鼻を左右に張り出し、大きく開口して歯と牙を表した激しい瞋怒の表情を見せる。耳を表す。

【品質・構造】針葉樹（桧）を用いて、角を別材製とする。頭頂やや右寄りで額から顎下まで割損し、さらに右口端から上下に割損する。胡粉下地を施して彩色仕上げとする。眼に銅板を嵌入し、銅釘でとめる。歯は黒色とし、一部に

金箔を用いる。右の角は後補。面裏は素地とする。

【銘記】面裏右頬部墨書「九」、面裏右顎部墨書「花押」、右耳紐孔部紙縫墨書「能面／第七号／奈良豆比古神社（朱印）」

【備考】室町時代／桃山時代。花押は武悪（18）と類似する。

13 小面 一面

【法量】面長 二一・九 cm 面幅 一二・九 cm 面奥 七・〇 cm

【形状】髪を中央で分け、毛筋は分け目から二本、こめかみ付近から三本に増える。目をふたえとしてかすかに笑みを浮かべ、口を少し開けて上歯を見せる。頬は下膨れに張り詰めて若々しく、わずかに二重顎とする。

【品質・構造】針葉樹の一材より彫出し、瞳孔を丸く開ける。胡粉下地を施して彩色仕上げとし、髪、眉、上歯を黒色とし、唇に朱を施す。現状、鼻先と下唇の一部の彩色が剥落して素地を呈する。面裏は墨塗とする。面裏額部に円形三点を三角形に配した符丁を表す。

【銘記】面裏眉間部刻銘「…」、面裏右頬部墨書「七」、右耳紐孔部紙縫墨書「能面／第六号／奈良豆比古神社（朱印）」

【備考】室町時代／桃山時代。平太（16）と、面裏の三星符丁が共通する。

14 曲見 一面

【法量】面長 二一・二 cm 面幅 一三・七 cm 面奥 六・九 cm

【形状】髪を中央で分け、毛筋は分け目から二本、こめかみ付近から三本、眉尻上部から三本を描く。目はふたえとして小さく見開き、口を少し開けて上歯を見せる。頬はやや痩せ、顎を少ししゃくれさせて受け口とする。

【品質・構造】針葉樹の一材より彫出し、瞳孔を丸く開ける。胡粉下地を施して彩色仕上げとし、髪、眉、上歯を黒色とし、唇に朱を施す。現状、鼻先と下

唇の一部の彩色が剥落して素地を呈する。

【銘記】右耳紐孔部紙縫墨書「能面／第拾号／奈良豆比古神社（朱印）」

【備考】室町時代〜桃山時代

15 中将 一面

【法量】面長 二〇・二cm 面幅 一三・八cm 面奥 七・九cm

【形状】頭頂に冠をあらわし、眉根を寄せて眉間に皺をあらわし、眉上に窪みを作る。目をふたえにし、やや目尻を下げる。開口して上歯を見せ、頬はやや瘦せて縦に皺を表す。口髭、顎髭を表す。

【品質・構造】針葉樹（桧）を用いる。瞳孔は四角。胡粉下地を施して彩色仕上げとし、冠、髪、瞳の周縁、上歯を黒色として、唇に朱を施す。現状、鼻先の彩色が剥落して素地を呈する。面裏は素地仕上げ。

【銘記】面裏額部墨書銘「花押」、面裏右頬部墨書「十二」、右耳紐孔部紙縫墨書「能面／第拾一号／奈良豆比古神社（朱印）」／中村（印）」

【備考】室町時代〜桃山時代。尉（8）と用材の特徴や面裏の処理がよく一致する。

16 平太 一面

【法量】面長 二〇・二cm 面幅 一三・四cm 面奥 七・六cm

【形状】額左右に髪を表し、眉尻を吊り上げる。やや眼窩を窪ませ、目を三角形にあらわす。開口して上下歯を見せ、口髭を左右に吊り上げ、顎髭を表す。

【品質・構造】針葉樹の一材より彫出し、瞳孔を丸く開ける。胡粉下地を施して彩色仕上げとする。髪、眉、口髭、歯、顎髭を黒色とし、唇に朱を施す。現状、鼻先と額左側、左頬骨付近の彩色が剥落する。面裏は墨塗とする。面裏額部に円形三点を三角形に配した符丁を表す（左下の円はやや左側にずれて並

び三角形に歪みが生じる）。

【銘記】面裏眉間部刻銘「一」、面裏右頬部墨書銘「二十一」、左耳紐孔部紙縫墨書「能面／第四号／奈良豆比古神社（朱印）」

【備考】室町時代〜桃山時代。小面（13）と、面裏の三星符丁が共通する。

17 祖父 一面

【法量】面長 二〇・六cm 面幅 一四・五cm 面奥 六・九cm

【形状】額右に丸い瘤を表す。眉を表す。全体に皺を巡らした老人の風貌で、両目はへの字に表して笑相とするが、右目をすがめ、口は左頬に向かって引きつって左口端が上がる。上歯二本を出して、右口端付近は開口する。

【品質・構造】針葉樹（桧）の一材より彫り出す。胡粉下地を施し彩色仕上げ。眉、左目、歯を黒色とし唇に朱を施し、額、瘤、鼻先の彩色が剥落する。面裏は素地仕上げ。

【銘記】面裏額部墨書「社」、面裏右頬部墨書「十四」、右耳紐孔部紙縫墨書「能面／□」

【備考】室町時代〜桃山時代。乙（19）と左目の形状、彩色や面裏の処理方法が類似する。

18 武悪 一面

【法量】面長 一九・〇cm 面幅 一四・二cm 面奥 九・七cm

【形状】頭頂に冠を表し、眉間の皺をV字に表し、眉を墨描きする。やや上目使いに目を大きく見開いて、耳を表し、大きな鼻の鼻翼を左右に開いて、上歯で下唇を噛みつつ口端を左右に張り出す。

【品質・構造】針葉樹を用い、右こめかみより右顎下まで割れ、上中下の三ヶ所に穴を穿ち、紐でとめた痕跡がある（現状は接着する）。胡粉下地を施して

彩色仕上げとする。彩色は二層あり、下層はやや明るい朱とし、上層に赤みを帯びた暗褐色を塗る。瞳は墨、白目は銀に彩色する。歯の根元は墨、歯先は銀色とする。額右方、額左方、右顎裏面が割損する。面裏は素地とし、経年の使用で黒ずむ。

【銘記】面裏右頬部墨書「一十三」、面裏左顎部墨書「花押」、左耳紐孔部紙繕墨書「能面／第拾三号」

【備考】花押は般若(12)と類似する。

【備考】室町時代〜桃山時代

19 乙 一面

【法量】面長 二〇・五cm 面幅 一五・七cm 面奥 七・三cm

【形状】輪郭を丸みのある三角形にかたどり、髪を表し、眼窩を山形に窪ませて目を笑相とし、両頬を膨らまして高く盛り上げ、かつ先端は窪ませて笑窪状とし、開口して上歯を見せて舌をのぞかせる。鼻・口・顎は両頬より低い位置とする。

【品質・構造】針葉樹(桧)を用い、両頬隆起部分に別材を短く。胡粉下地を施し彩色仕上げとして、髪を墨描きし、頬と唇は朱、歯は黒色とする。面裏は素地とする。

【銘記】面裏右頬部墨書「四」、右耳紐孔部紙繕墨書「□□／奈良豆比古神社(朱印)」

【備考】室町時代〜桃山時代。祖父(17)と左目の形状、彩色や面裏の処理方法が類似する。

20 狐 一面

【法量】面長 一六・五cm (下顎先端まで) 面幅 一四・五cm

面奥 一〇・七cm (上顎先端部)

【形状】耳を表さず、眼窩をやや窪ませて吊り上げた目を配す。鼻筋を細く伸ばして先端に鼻孔をあらわし、上顎に歯を並べる。下顎も同様に歯を並べ、舌を表す。体毛を表す。

【品質・構造】針葉樹とみられる材を用い、上顎内部に鉄製吊り環、舌部先に吊紐が残る。上顎を含む面部を一枚とし、左耳付近の小材が割損する。左頬材も割損し現状接着される。左頬の縁に別材を寄せ、下顎は大略一枚製として後方に一枚を寄せる。補修に用いた茶褐色の顔料は瘰癧(12)に近い色味を示す。眼に銅板を嵌装し、左眼の目尻部を欠失する。右眼目頭に朱を施す。表面は胡粉下地を施して彩色仕上げとし、茶褐色の毛描きを施す。面裏は素地とする。

【銘記】面裏右頬部墨書「十八」、右耳紐孔部紙繕墨書「能面／第拾五號」

【備考】室町〜桃山時代

21 面箱 一合

【法量】幅 三六・一cm 奥行 二四・三cm 高 一九・四cm

【形状】蓋上部を甲盛とし、印籠蓋として身と組み合わせる。身の長辺の左右両側に銅製環を設けて紐を掛ける。

【品質・構造】針葉樹の板材を組み合わせて蓋と身を作り、総体黒漆塗として、内部も黒漆塗とする。銅製金具は一方の台金具を列弁文三段、環台に環を設け、もう一方は台金具が列弁文一段で環台に環を設けるもので、前者を模した後補部材と見られる。

【備考】室町時代〜桃山時代

## 二 仮面群の調査成果

### 1 新たに見いだされた翁・三番叟の作者銘について

奈良豆比古神社仮面群の面裏赤外線画像については、既に『奈良豆比古神社の祭礼と芸能』において紹介されているが、同書ではその翻刻や分析は行われていなかった。仮面群の伝来史を検討する上で重要な情報を得られるものと考えられたため、本稿では改めて行った赤外線撮影画像を元に、その情報を整理し、共有化しておきたい。まず本節では翁系面の作者銘について確認する。

現在、奈良豆比古神社の翁舞（国指定無形民俗文化財）において使用されている翁系面四面（翁（1）～（3）、三番叟（5））のうち二面に、制作者と見られる銘記を確認できた。翁（1）は翁三人舞のうちの太夫が使用するもので、面裏額部に「万借作」と記されていることを確認した。そして三番叟（5）の面裏眉間部には「康吉」と読める文字を確認できた。

翁（1）作者の万借というのは人物名としては不思議な字配りと響き（「バンシヤク」あるいは「マンシヤク」か）であるものの、例えば伝説的な面打としての日光・弥勒・赤鶴や夜叉・小牛・千種等のように通称を用いるものや、厳島神社の天文一三年（一五四四）銘翁や長瀧白山神社の天文一一年銘翁を制作した駿河国住人の酒惣のように略称を用いるものなどがあり、本例もそうした名乗りの範疇といえる。

卵形の輪郭に、やや浅めではあるが柔らかな彫り口の皺を巡らせた上品な老翁の笑相で、形式化による表現の硬直が見られず、また材の厚みのあるようすも古様であり、古い彩色層が確認できることも含め、制作時期は室町時代に遡ると判断される。作者の判明する中世翁面の新たな事例として、重要な情報を

提供するものといえる。

三番叟（5）作者の康吉については、まずは宝生家に伝来する猿飛出（重要文化財）を製作した同名の人物について思い浮かぶ。これは面裏額から眉間にかけて「治部法眼康吉（花押）作之」と記されるもので、治部法眼という高位の名乗りや達筆の書体、良質な材を使用することなど他の猿楽面との違いから、七条仏師康永の前代にあたる康吉（こうきつ）の可能性が示されている<sup>5)</sup>。

両者を比較すると、正統仏所の仏師作と推測される宝生家猿飛出が、その優れた彫技を示すように細かな抑揚で肉身の自然な質感を表しているのに対して、奈良豆比古神社三番叟は老翁の笑相を、あえて自然さを後退させ、例えば舞楽面新鳥蘇に見られるような一種の様式化を目指しているところに特徴があり、表現の傾向は異なるといえる。名の一致は偶然とみなしておくべきで、読みは「ヤスキチ」「ヤスヨシ」「コウキチ」等となる<sup>6)</sup>。

三番叟（黒色尉）は翁（白色尉）に比べ、ゆがみの表現を付与したり荒々しく彫り出すことで、神のもどきとしての仮面の原初性を保持するといえるが、本面の場合は様式化された笑相が神秘性の表出につながっているものであり、三番叟表現の一展開と捉えられる。数少ない作者銘を有する中世の三番叟として、その重要性は今まで以上に高まるといえよう。

### 2 面裏の番号について

奈良豆比古神社仮面群のうち一三面について、目視および赤外線撮影画像から面裏右頬部の墨書による番号の書き入れを確認できる。判読不明分を除いて整理すると次のようになる。

「二」翁（5） 「四」狐（19） 「七」小面（13）

「八」尉（8） 「九」般若（12） 「十二」中将（15）



「二十三」武悪(18) 「十四」祖父(17) 「十五」翁(6)  
「十八」三番叟(20) 「二十一」平太(16) 「二十四」怪士(11)  
「二十〇」尉(9)

把握できたものでは二から二十四までの漢数字が使用されており番号は重複していない。くずし方や線の太さの違いから筆跡は二手ほどに分かれるが、いずれも面裏右類に記入する点は共通する。また、三章で詳述する作風を等しくする仮面の組み合わせや、能面か狂言面かの種別などと順序は関連しておらず、配列の意図はうかがえない。言うまでもないが、これらの状況から番号の書き入れは各面の制作時に施されたものではなく、のちに管理のために付されたものであることが明らかである。

明治二四年(一八九三)に作成された奈良豆比古神社の「什宝物明細帳」<sup>(7)</sup>には宝物として「古面 式拾五面」が記載されている。現在所蔵される仮面はここまで見てきたとおり二〇面であるが、これらの番号は明細帳の記録を裏付けるものといえよう。

続いて、紐穴に付された紙縫について整理しておきたい。こちらは最大で「第十六号」が確認できた。現在翁舞にて使用している翁(1~3)および三番叟(5)を除いた仮面すべてに付されている。怪士(11)・祖父(17)・乙(19)については番号が不明であるが、確認できた番号の順に並べると次のようになる。

「一」癒見(10) 「二」翁(4) 「三」尉(9)  
「四」平太(16) 「五」三番叟(6) 「六」小面(13)  
「七」般若(17) 「八」尉(8) 「十」曲見(14)  
「十一」中将(15) 「十三」武悪(18) 「十五」狐(20)  
「十六」三番叟(7)

番号不明の先の三面は「九」「十二」「十四」のいずれかの番号があてられて

いたとみてよいだろう。第十六号の三番叟(7)は先行研究では狂言面の祖父として扱われていたが、武悪と狐に続くことから紙縫を付した当時にも狂言面とみなされていたことが理解される。大枠として、能面、狂言面については区別しているので、「十二」「十四」が祖父(17)・乙(19)のどちらかで、「九」が怪士(11)であったと推測される。

このような配列を見る限り、能面を鬼神面や女面など種類別に分類するような意図はうかがえない。ただしその中で、早くから重要視された癒見が第一号にすえられ、特に古様で秀逸な造形の翁(4)と「長命次郎大夫」金泥銘を持つ尉(9)が続くことは当社の仮面に対する評価が反映されているとみられる。あるいは近代以降に、何らかの展示での使用に際して付されたような可能性も考えておきたい。<sup>(8)</sup>

面裏右類の番号が少なくとも一九世紀末まで二五面の仮面を所蔵していたこととの裏付けとなる情報である。そして現在使用されない一六面に付された紙縫は、明治二四年(一八九三)以降のいずれかの時期に五面が失われた後になって、銘記を有する癒見や尉を優先しつつ、能狂言面を分けた整理がなされた履歴を伝えている。どちらの番号も、仮面群の伝来を検討する上で貴重な歴史の痕跡を示すものといえる。特に今は失われ行方の知れない五面については、面裏右類に同じ字体の番号が記されている可能性がある。今後搜索していく上で大きな手がかりとなるう。

### 三 仮面群の分析とその形成過程

#### 1 翁系面について

現在二〇面が確認される本仮面群がいかにして奈良豆比古神社に集積された

のか、その事情についてはこれまで検討されることがなかった。

例えば翁（白色尉）四面、三番叟（黒色尉）三面からなる翁系仮面七面という多数が伝来することについて、それを翁三人舞の存在から説明することは可能であるが、一方で三番叟が三面あることの説明にはならず、現行の神事芸能から仮面群の成立過程を逆照射する方法は有効ではない。結局のところ、仮面自体の情報から仮面群を分析し分類していくことで、新たな視点を構築していくかはなからう。本章ではそうした個別の仮面ごとの比較を行い、仮面の伝来史にわずかにでも迫り、仮面群が語る歴史を、断片的にでも紡いでみることにしたい。

まず翁四面、三番叟三面について、従来これらの一具性について検討されることがなかったが、二組については翁・三番叟の表現の一致を見いだすことができた。翁（2）と三番叟（6）は、幅の大きな冠（烏帽子）と、目尻の皺とその上方の皺の二本が額に向かって大きく曲がっていく表現、側面からみた鼻の立体表現に共通点があり、三番叟が表裏ともに故意に荒く仕上げていることを踏まえた上でなお、両面の様式は一致するといえる。

もう一組、翁（3）と三番叟（7）は、額から眉間にかけて、ほとんどうねりのないやや丸みを帯びた皺が各八本（冠を含む）ずつ整然と並ぶ表現、眉と口髭を朱と白の線で描き出す仕上げ、面裏の材質と墨塗りの仕上げが一致している。なお三番叟（7）の目は父尉のものであり、本来父尉であった仮面を後世に黒塗りして三番叟とした可能性が高いが（ただし転換時期も中世〜近世初頭まで遡るか）、いずれにせよ一具性に疑いはない。

このようにこれら翁系面のうち二組四面については、それぞれ別々に成立した翁・三番叟が、ある段階で奈良豆比古神社に集められ、そのうち翁のみが万借作翁（1）と康吉作三番叟（5）とともに翁舞に用いられ、三番叟（6）と三番叟（7）は同社の祭礼では用いられていないという状況が理解される。

現状用途のない二面の三番叟であるが、彩色の剥落や擦れなど使用痕跡が明確に確認でき、いずれかの翁猿楽にて長期間使用されたものであることが分かる。このことを踏まえれば、それら三番叟と対となる翁面についても、もともと翁三人舞のために製作されたものではないということが明らかである。翁三人舞については、近世の春日社新猿楽・若宮祭における宝生・金春・金剛三座年預衆による三座立合の翁をもとにして、それを模倣した形式とする有力な見解がある<sup>9)</sup>。新たに翁三人舞へと移行する際に、同社に中世の翁・三番叟が集められたか、あるいはそれまでに集約されていた翁面を活用して翁三人舞に移行したのか、そのどちらであったかは今のところ明らかにはしないが、ここで整理して示したような仮面の伝来状況は、一人翁から三人翁への移行という状況とも矛盾せず、奈良豆比古神社翁舞の芸能変遷の実態を仮面の側からも補強するものであることを強調しておきたい。

それでは残る一面、現行の翁舞には全く関わらない翁（4）はいかなる意味を有しているのだろうか。本面は、他と比べて幅の広い丸みを帯びた輪郭を有し、鼻梁が細く鷲鼻に表された鼻は、一般的な翁面とは軌を一にしない独特の趣がある。おおらかで風格があつて、円満な寿ぎの表情に優れており、堅実な彫技もあいまつて仮面群中において最も洗練された出来映えを示している。

翁面が、中央国家儀礼の雛形として修正会の浸透とともに全国に伝播し、農耕儀礼と結びついて信仰の対象となつていったゆえに仮面自体の造形も一様であるとする見解がある<sup>10)</sup>。この考え方においては、翁面は最初に造形化された時をピークに、それを規範として模倣され、表現は形式化の一途をたどることになる。しかしこの翁（4）の洗練された出来映えと、後世の翁面に踏襲されなかった鼻梁の細い鷲鼻表現が同居するありようを、定形から逸脱して独自性を獲得した地方的表現と位置づけることには躊躇される。

翁という神の化現が表されるにあたっては、先行する同種の仮面の規範性は

強固ではあっても、様式の固定化以前の段階ではさまざまな神らしさの表現が模索されたことを、本面は示していると捉えたい。またそれこそが中世仮面の魅力といえよう。本面は、翁面表現の豊かなバリエーションを示す、南北朝時代～室町時代前期ごろまで遡りうる、大和地域を代表する翁面の古例と評価しておきたい。奈良豆比古神社仮面群中、最も古い資料の可能性がある。

なお、『平城坊目考』巻三奈良神社条に「古老云観世又三郎初て勸進能の時翁の面装束等借用す、是往古より散楽の面于今存すか故なりとそ」とある。また「大和国添上郡奈良奈良坂村旧記」<sup>12)</sup>では寛正五年（一四六四）京糺原勸進能で音阿弥が当社の父王翁清男黒男三面を借り、將軍が仮面を取り寄せ御覧になった旨が記される。後者は近世において翁三人舞となった後に内容を改変して成立した一種の縁起といえるが、前者の観世又三郎（音阿弥、一三九八～一四六七）が翁面と装束を借用したという内容にはその三人舞の要素が見られず、より古い伝承に基づくものであるらしい。この伝承に事実が含まれているならば、音阿弥が借用したというのはいはこの翁（4）であったのではなくいかとも想像される。本面の優れた出来映えを考えれば、こうした伝承との一定の整合性はあるといえ、参考に供しておきたい。

## 2 猿楽面（能面・狂言面）について

翁面以外についても、一具性を把握できる仮面が含まれる。まず尉（8）と中将（15）はともに整って堅実な出来映えを見せるが、面裏の用材の色味や年輪表現が共通し一具と判断される。小面（13）と平太（16）はともに面裏額部に三星の符丁を有し（詳細については次章で検討する）、目鼻周辺の削り抜き方などが一致し、面裏を墨で塗る処理も共通する。そして祖父（17）と乙（19）は左目の形状や彩色、面裏の材質や削り方が類似していて一具と判断さ

れる。

なお、応永二〇年（一四一三）銘を有する癒見（10）と長命次郎大夫銘を有する尉（9）について、これを同一作者、あるいは近い人物の作であるとする見解がある<sup>13)</sup>。尉（9）も製作時期が室町時代に遡る古面であるが、両面を結びつける上での根拠とされるのが、木地に紙貼りして彩色する「紙彩色」技法の共通ということであった。今回改めて調査を行ったところ、尉（9）には紙貼の形跡が確認できず、癒見（10）についても、頭頂やや左から左目中央に至る割損部の表裏に幅1cmほどの紙貼はなされているものの、これは製作当初のものではなく、後の修理時に割れた部位に施された補強用の素材と判断された。作風としては、現行の癒見面表現とは異なる自由な造形の癒見（10）に対して尉（9）には定形を逸脱しない堅実さがあって、作者は異なるものと判断しておきたい。

これらの仮面（能・狂言面）群は、やや顔の細い尉（8）、笑相を強調した尉（9）、癒見（10）、怪士（11）、般若（12）、小面（13）、曲見（14）、中将（15）、平太（16）、祖父（17）、武悪（18）、乙（19）、狐（20）と同じ種類の仮面が重ならず、かつ能・狂言の幅広い演目に対応しうる構成であることで、飛出や怨霊系など足りない分については、明治時代以降に流出した五面のうちに含まれていた可能性が高い。こうしたことから、これらが別々に奉納されたのではなく、かつて実際の演能に使用するためのものとして、いずれかの演能集団の差配のもとで形成された仮面群との判断が妥当であろう。かつ明確に江戸時代に製作時期が降るといえる仮面が含まれていないことは、これら仮面群が中近世移行期ごろまでには形成され、その後は変動がなかったらしいことも見えてくる。

奈良豆比古神社での翁舞が、一八世紀の段階ではすでに専業の大夫ではなく住民（所ノ者）によって行われていることは明らかにされているが、能・狂言

面についても、中近世移行期ごろまでに仮面群が形成されて以降、專業の猿楽役者による演能は行われなくなったことを示している可能性がある。

このように、奈良豆比古神社仮面群を分析すると、特に猿楽面（能面・狂言面）については、本来はいずれかの演能集団の関与のもとで形成された仮面群と理解された。それがいかなる集団であるのか、特に三星符丁を伴う仮面に注目して、次章で確認したい。

#### 四 奈良豆比古神社仮面群と長命猿楽

##### 1 面打「ダンマツマ」推定仮面の比較検討

小面（13）と平太（16）には面裏額部に小さな円形三つを三角形状に配した符丁が刻まれる。各円形はわずかに削って窪み、中央には刺突痕があることから、ねずみ錐のような道具を用いて穿ったものとみられる。

この二面に見られる符丁について後藤淑氏は、江戸時代初期の狂言師・大蔵虎明が著した『わらんべ草』に「だんまつま 狂言面の作。是は長命徳右衛門おぢ也。面の内に三星あり」とあることに注目し、これに該当するならば「ダンマツマ」作ということになること、さらに「長命次郎大夫」金泥銘のある尉（9）とも関連する可能性を提示した<sup>14</sup>。かつ喜多古能が著した『面目利書』に「ダンマツマ 彩色細に光沢なく柔にて福来の如くなる物多し、至て堅く光沢もあり、出来替りもあり、裏は鉋目荒く赤鶴に似て弥荒し、日光・弥勒の類に似たり、但目の裏四角に取たるなり、是を「ダンマツマ」の証とするなり」とあることも示し、同様の符丁を持つものとして岐阜県関市春日神社の女面を挙げている。

関市春日神社の女面は、面長二一・三cm、面幅一三・五cm、面奥六・八cmを測り、

ヒノキまたはサワラ材の板目を用いた室町～安土桃山時代（一六世紀）の製作で、符丁に関しては「面裏額の位置に三角に小円形（中央が深い二重）を三つ並べる。面打ダンマツマの作であることを示す印とされる」と報告される<sup>15</sup>。面裏は素地仕上げとし、瞳穴を四角形に開けている。

この両社の面が同じダンマツマによるものであるのか、同じ若い女の面である奈良豆比古神社の小面（13）と関市春日神社の女面の造形について比較して検討しておきたい。以下本節ではそれぞれ「小面」（図1）、「女面」（図2）と表記して区別する。

まず正面から輪郭を観察すると、「小面」はやや下膨れの楕円形で顎は丸みを帯びる。「女面」は額の周縁がやや角ばり頭の鉢が広い印象であり、頬の側面から顎にかけて鋭角な輪郭を描く。特に頬以下の輪郭に注目すると「小面」



図1 奈良豆比古神社小面

は半円、「女面」は逆三角に近いという違いがある。

目の表現にもそれぞれに特色が見られる。「小面」の瞳穴は丸く穿たれ、目の下縁は山なりである。この下縁は目頭から目尻にかけて跳ね上がるような円弧となっていて笑相が強調された独特な表情を生み出している。一方の「女面」は瞳穴を四角く穿ち目の下縁を直線とする。また、両面とも瞼に線を刻んでふたえとするが、「小面」では上縁に一定の幅で線が沿うのに対し

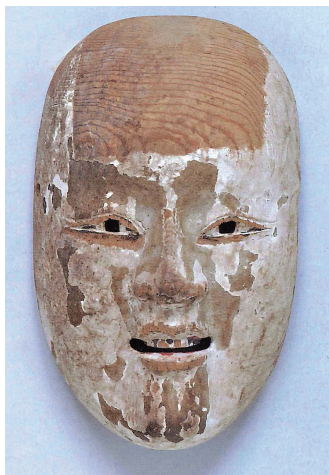


図2 春日神社女面

て「女面」では目尻に至るにつれて外側へ向けて線が跳ね上がる。

続いて右側面から観察する。まず頭頂から眉間に至る立体表現は「小面」ではなめらかな曲線である。これに比して「女面」は頭頂～眼までの円弧が膨らみ、額付近と眉間で曲線がやや変化している。どちらも鼻先の彩色が剥落している、「小面」は鼻梁の上方から、「女面」では鼻梁の中ほどから鼻先に向けて丸みをつけており印象が異なる。また「女面」は小鼻の膨らみにわずかな抑揚がある。上唇と下唇の位置関係を比較すると、「小面」は下唇が上唇より前方に出ているのに対し、「女面」は上唇の先が下唇の先にかぶさるように位置する。唇の表現については、「小面」では上唇に厚みがなく、「女面」では人中線を境に上唇の左右に山を描くような輪郭で縁取り、下唇は肉厚があつて抑揚を付けている。

奈良豆比古神社の「小面」は丸い瞳穴や目の下縁を強く曲げる点などに独特の個性があるが、全体的には下膨れの輪郭や二重顎にし下唇を前に出すなど現行の小面に近い形式を持つと言える。これに対して関市春日神社の「女面」は頭の鉢を広くして額、鼻梁、唇などに抑揚を持たせることでより生彩に富んだ表現を得ており、小面の表現が形式化する以前の女面と判断される。

このように両面の作風には明確な違いがあることを確認した。すなわちともによく似た三星符丁を有するものの、作者は異なるものと結論される。

あらためて各面の三星符丁を観察すると、平太では左下の小円が左側にずれて位置しており、「小面」にもわずかに左にずれる傾向がある。一方で「女面」では右下の小円がやや右側へ配されるがほとんど正三角形である。経年劣化の影響もあるが、小円の刻み方についても「小面」・平太に比して「女面」の小円中央の穴の周囲は深めに彫りくぼめられている。また大きさも、奈良豆比古神社の二面の符丁の方が少し大きい。符丁を刻んだ人物の癖や道具の違いを反映したものだろう。

## 2 仮面群の形成と長命猿楽

奈良豆比古神社の三星符丁を有する小面(13)と平太(16)が、面打「ダンマツマ」の真作であるのか、あるいは異なるのかについて、現在得られる限られた資料や情報から判断するには至らず、留保せざるを得ない。ただし三星符丁が施されているということ自体が、仮面群の性格を考える上で貴重な情報を提供しているといえる。表章氏による長命猿楽研究に導かれながら、<sup>(16)</sup>確認しておきたい。

奈良豆比古神社の尉(9)には面裏に「長命次郎大夫」という金泥銘が記される。長命姓の猿楽は南山城に本拠地を持った山城猿楽の系統であり、その流れを汲むと推測される長命茂兵衛家は明治初年まで南都両神事で金春座年預を勤め、猿楽という生業を継承していた。長命次郎大夫は、大蔵虎明の『明暦堺七堂狂言芝居』によれば、天正二〇年(一五九二)九月十八日・十九日に山城の和岐神社で行われた大蔵道春(虎明の祖父にあたる)の勸進狂言の(式三番)の翁を勤め、また『わらんべ草』の草稿『むかしがたり』などから、長命次郎大夫を名乗る役者が虎明の時代までに少なくとも三代は続いたとされる。長命次郎大夫が率いた猿楽はのちに大和四座である金剛座にツレ役として合流し、長命茂兵衛家とは別に幕末まで命脈を保ったという。

また、大蔵道春の勸進狂言に参加しただけでなく、長命次郎大夫は金剛座に属した後にも金春座狂言方大蔵家とは親密であつたらしい。道春の五十回忌にあたる正保三年(一六四六)に子の大蔵虎清が主催した奈良での勸進猿楽でも長命次郎大夫が能の大夫として起用され(般若窟文庫『江戸初期能組控』)、さらに表氏は道春の末娘が長命次郎大夫の妻だとする伝承があることから姻戚関係も想定され、山城・和岐神社が所在する平尾に道春が住んでいたことから長命と大蔵の関係がかなり早くからあつたと推測されている。

加えて表氏は観世座狂言方の鷲流と長命次郎大夫家の縁が深かったことを『わらんべ草』八十段と慶長年間当時の番組を元に明らかにしている。『わらんべ草』で鷲の本名は長命とされ、これは「今の次郎大夫おうぢの子かたになりて、名字をもらふ」ことによつたと虎明は記す。慶長一九年（一六一四）に宝生座から観世座に転じた鷲仁右衛門宗玄（一五六〇～一六五〇）が一時期「長命伊右衛門」「鷲大夫」という二つの名字を用いていて、「長命」を称することは狂言役者として望ましいことであり、長命猿楽が狂言史の上で重要な位置を占めたものと捉えられている。

また天野文雄氏は奈良豆比古神社の翁舞詞章について金春座年預の詞章に影響されたものと分析している<sup>17)</sup>。前述のとおり金春座年預には南山城を中心に舞場を有した長命茂兵衛家が含まれ、南都両神事では明治初期まで千歳と三番叟を担当していた。長命次郎大夫家と長命茂兵衛家の関係を明確にする史料に恵まれないものの、奈良豆比古神社を基点にすれば両者に関係があったと見ることが妥当であろう。

奈良豆比古神社の周辺、古く東山中と呼ばれた大和高原地域の社寺には古様な猿楽面・翁系面が複数伝わっているが、狂言面と見なせるものは奈良市大保町八坂神社に伝来した瘦男と、尉の一種として現状扱われている仮面の二面のみ<sup>18)</sup>で、奈良県内では他に天河大辯財天社の祖父面が確認できにすぎない<sup>19)</sup>。狂言は能と比べて仮面を用いない演目がほとんどであるため、奈良豆比古神社の仮面群に祖父、武悪、乙、狐の四面の狂言面が含まれることは、本仮面群の性格を示す大きな特徴であるといえる。

このように長命次郎大夫家と大蔵家の関係が深いこと、かつ先に確認していたように大蔵虎明の『わらんべ草』でダンマツマが「狂言面の作。長命徳右衛門おぢ」と記されること、そして狂言面四面が奈良豆比古神社に伝来していることを合わせて考えると、小面と平太にダンマツマゆかりの三星符丁が刻まれ

ているということは（それが当初の符丁であっても、後入れの符丁であっても）、これら仮面群を形成し使用した演能集団が長命猿楽であったことを示す重要な手がかりであると判断されよう。あるいは、符丁を付していない狂言面の中に、狂言面の名手であるダンマツマが手がけたものが含まれている可能性についても、考慮してよいものと思われる。

おわりに

本稿では、奈良豆比古神社の仮面群について、美術史的方法による仮面自体の情報把握をもとに、その法量・形状・品質構造等の基礎情報と図版及び赤外線画像を紹介し、新たに確認された仮面製作者の銘記と、墨書きされた番号の整理に基づくかつての仮面数など伝来状況について提示した。その上で、これら仮面群について、製作環境を同じくする仮面の同定作業に基づき整理し、翁面の集約のあり方が翁舞の芸態の変遷とも重なること、猿楽面がいずれかの演能集団のもとで形成された仮面群であること、そしてその演能集団が長命猿楽である可能性が高いことを明らかにした。

なお検討の及ばないことも多いが、仮面を通じた地域史の一断面を、わずかながらも叙述した。今後、近代期ごろに散逸したとみられる五面の仮面の追跡を含め、さらなる資料を博搜し、奈良豆比古神社と奈良坂の歴史の再構築に貢献することができればと思う。

注

(1) 山路興造「奈良豆比古神社の翁舞」（日本青年館公益事業部編『民俗芸能』七〇、一九八九年）、西瀬英紀「語りの翁とひとり翁―民俗芸能の翁研究をめぐって―」（『芸能史研究』一〇九、一九九〇年）、天野文雄「奈良豆比古神社の翁舞の詞章―年預の翁」

詞章の系譜―(同『翁猿楽研究』和泉書院、一九九五年)など。

(2) 奈良豆比古神社の仮面に言及する主な文献は次の通り。懇見面は全てで取り上げられるものの、他の仮面については一部を紹介するにとどまり、全ての仮面図版を掲載するのは⑬⑭⑮⑯である。

- ① 京都国立博物館『日本の仮面』(眞陽社、一九五五年)
- ② 奈良県教育委員会編集発行『奈良県指定文化財第一集』(一九五六年)
- ③ 小林剛「室町時代の能面」(『文学』二五、一九五七年)
- ④ 中村保雄「奈良豆比古神社の能面」『観世』二九―二、一九六二年)
- ⑤ 後藤淑「能面史研究序説」(明善堂書店、一九六四年)
- ⑥ 京都国立博物館「特別展覧会『能面と能装束』目録及び解説」(光琳社、一九六四年)
- ⑦ 京都国立博物館「能面選」(光琳社、一九六五年)
- ⑧ 金子良運「日本の面」(筑摩書房、一九六六年)
- ⑨ 川島将生「奈良豆比古神社の翁舞」(『藝能史研究』二四、一九六九年)
- ⑩ 田辺三郎助ほか編『原色日本の美術 第二十一巻 面と肖像』(小学館、一九七一年)
- ⑪ 小林剛「彫刻 第五節 能狂言面」(奈良市史編集審議会『奈良市史 美術編』、奈良市、一九七二年)
- ⑫ 京都国立博物館編集発行『古面の美』(一九八〇年)
- ⑬ 佐々木進「能面」(小山弘志ほか編『図説日本の古典 十二 能・狂言』、集英社、一九八〇年)
- ⑭ 京都国立博物館「古面」(岩波書店、一九八二年)
- ⑮ 奈良県史編集委員会『奈良県史 第十五巻 美術工芸』(名著出版、一九八六年)
- ⑯ 後藤淑「中世仮面の歴史的・民俗学的研究」(多賀出版、一九八七年)
- ⑰ 菅居正史ほか編『大和の能面』(保育社、一九九六年)
- ⑱ 村田昌三『奈良阪町史』(私家版、一九九六年)
- ⑲ 町田市立博物館編集発行『鬼面の造形―鬼は内!』(二〇〇〇年)
- ⑳ 奈良地域伝統文化保存協議会編集発行『奈良豆比古神社の祭礼と芸能』(二〇〇六年)
- ㉑ 田辺三郎助「能面芸術の形成」(『國華』一四三二号・一四三六号、二〇一五年)
- ㉒ 高妻洋成「材料科学の視点から見る能・狂言面」(神戸女子大学古典芸能研究センター『能面を科学する世界の仮面と演劇』勉成出版、二〇一六年)

⑳ 「木造能面懇見 千草作」(『月刊文化財』六八、二〇二〇年)

- (3) 奈良地域伝統文化保存協議会編集発行『奈良豆比古神社の祭礼と芸能』(二〇〇六年)
- (4) 東京文化財研究所大谷優紀氏の研究報告によれば、酒窓については酒井惣左衛門という面打であることが新たに確認されている(『TOBUNKEN NEWS』七九、東京文化財研究所、二〇二二年)
- (5) 田邊三郎助「面打ち―能面作家考―」(『月刊文化財』一八七、一九七九年、同『仮面の研究 下巻』中央公論美術出版、二〇一九年に収録)
- (6) 本面作者の評価にあたっては田邊三郎助氏より有益な助言をいただいた。記して謝意を表す。
- (7) 「奈良市神社明細帳」のうち(奈良県立図書館所蔵奈良県庁文書〔請求記号〕N34-83d)
- (8) 当社の近隣では明治八年(一八七五)から明治二十七年(一八九四)までに少なくとも一八回開催された奈良博覧会が知られる。ただし現存する明治八年、九年の「奈良博覧会物品目録」(奈良県立図書館所蔵)には出陳を確認することはできなかった。
- (9) 山路興造「奈良豆比古神社の翁舞」注(1) 前掲論文、西瀬英紀「語りの翁とひとり翁―民俗芸能の翁研究をめぐって―」注(1) 前掲論文
- (10) 大谷節子「弘安元年銘翁面をめぐる考察―能面研究の射程―」(神戸女子大学古典芸能研究センター編『能面を科学する―世界の仮面と演劇―』勉成出版、二〇一六年)
- (11) 藪田嘉一郎「能楽風土記―能楽の歴史地理的研究―」(檜書店、一九七二年)
- (12) 中村保雄「奈良豆比古神社の能面」(『観世』昭和三十七年二月号、一九六二年)
- (13) 山路興造「翁の座―芸能民たちの中世―」(平凡社、一九九〇年)
- (14) 後藤淑「能面史研究序説」(明善堂書店、一九六四年)
- (15) 関市協働推進部文化課文化財保護センター編『関市春日神社文化財詳細調査報告書』(関市文化財調査報告五〇)(関市、二〇二二年)。なお関市春日神社は大和から移住した刀鍛冶が春日大社から氏神として勧請して創建されたとされ、合計六一面の仮面(能面四八面、狂言面五面、行道面・追儺面八面)や能装束が伝来した。優れた中世仮面が含まれ、大和四座である金春流や宝生流との関連が伺われる銘を持つ仮面も所蔵される。
- (16) 表章「長命猿楽考」(『永島福太郎先生退職記念 日本歴史の構造と展開』山川出版社、一九八三年)。なお長命猿楽の活動に関してはほかに高田照代「大和高山八幡宮の楽頭

職の変遷と神事能の展開」(同『祖霊と精霊の祭場―地域における民族宗教の諸相―』岩田書院、二〇二二年)でも言及されている。また、長命茂兵衛家伝来文書については長田あかね「年預と《翁》―長命茂兵衛の活動を中心に―」(『藝能史研究』一九五、二〇一一年)、同「長命茂兵衛家文書(二)」「(三)」(『藝能史研究』二二一・二二二・二二九、二〇一五年・二〇一六年・二〇一七年)などの先行研究がある。

(17) 天野文雄「奈良豆比古神社の翁舞の詞章―年預の《翁》詞章の系譜―」(注〔1〕前掲論文)

(18) 奈良県立美術館編『奈良県指定の文化財―美術工芸―』(大和美術史料第二集)(奈良県立美術館、一九八三年)

(19) 奈良県教育委員会編『奈良県指定文化財第九集』(奈良県、一九六八年)、中村保雄『天河と能楽』(駸々堂出版、一九八九年)参照。

付記

本稿作製にあたり、奈良豆比古神社宮司辰己眞一氏、奈良豆比古神社翁舞保存会会長豊田義一氏を始め奈良阪地区住民の皆様から格別のご高配を賜った。また奈良国立博物館寄託の仮面調査にあたり、同館山口隆介氏のご高配と、岩井共二氏、三田覚之氏、三本周作氏、内藤航氏、伊藤旭人氏のご協力を得た。ここに記して謝意を表す。

掲載図版のうち図2は「関市春日神社文化財詳細調査報告書」(注〔15〕前掲)より転載した。その他の図版は大河内の撮影による。



参考 癩見 (10)



参考 翁 (4)





1 翁（白色尉）



2 翁（白色尉）



3 翁（白色尉）



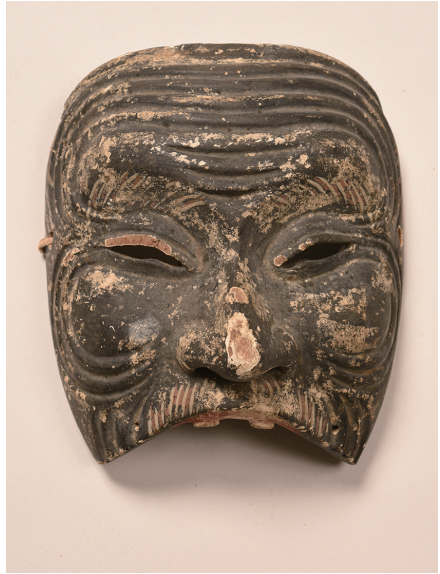
4 翁 (白色尉)



5 三番叟 (黒色尉)



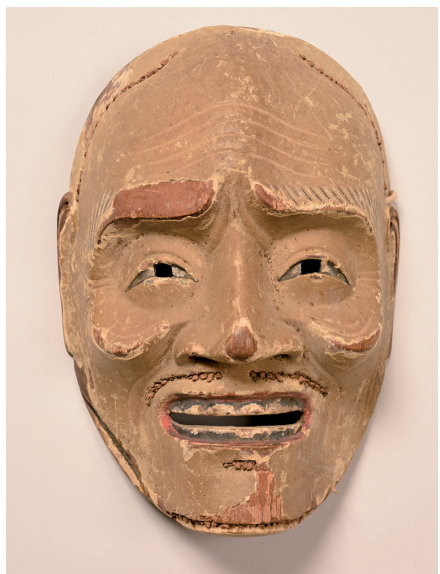
6 三番叟 (黒色尉)



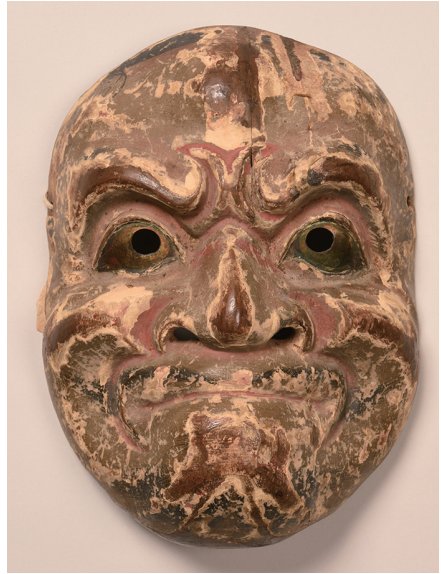
7 三番叟 (黒色尉)



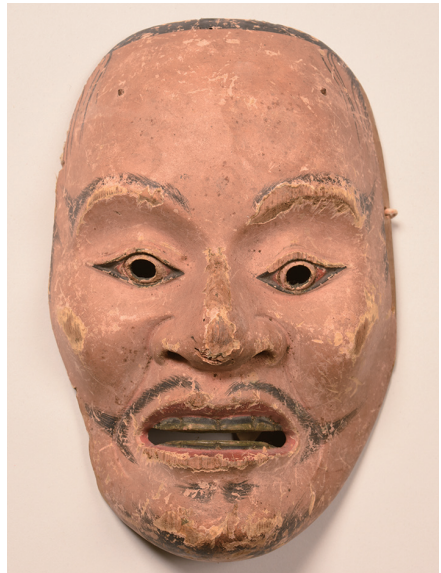
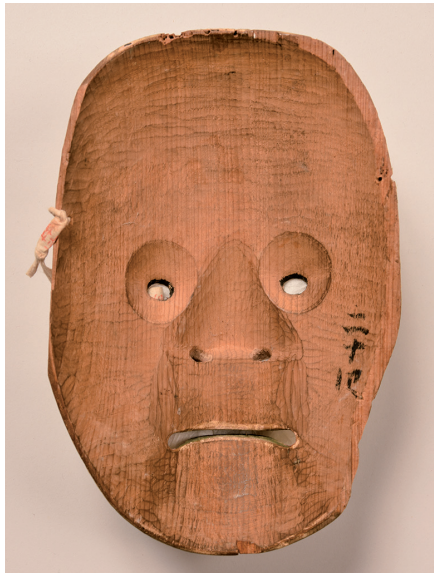
8 尉



9 尉



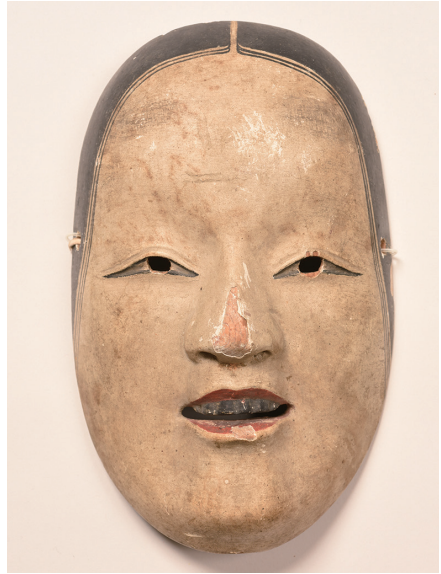
10  
癡見



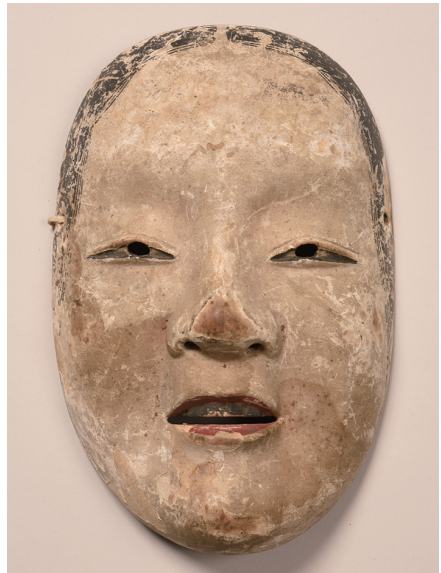
11  
怪士



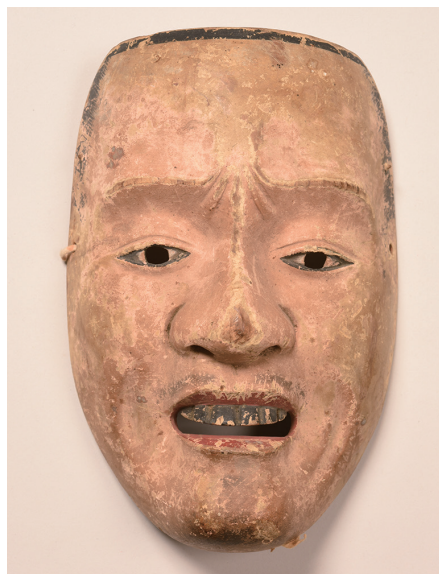
12  
般若



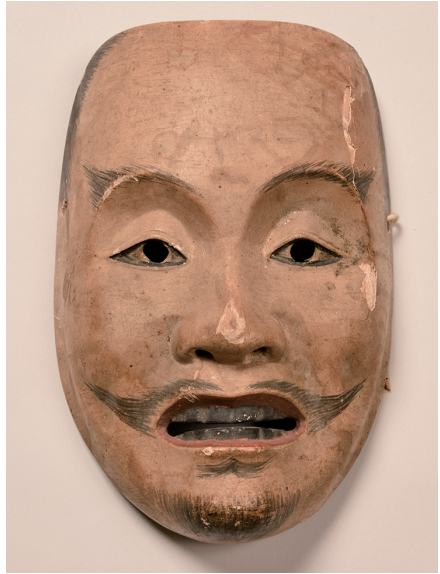
13  
小面



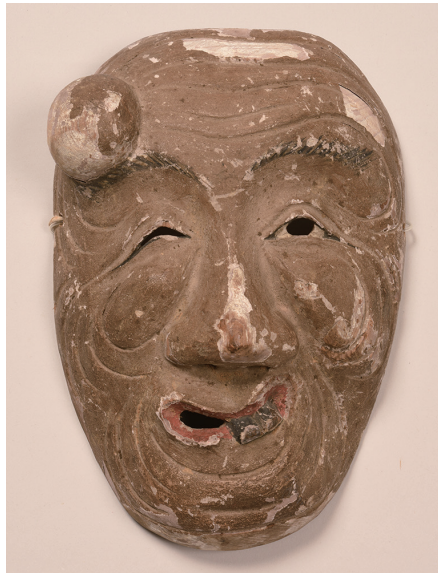
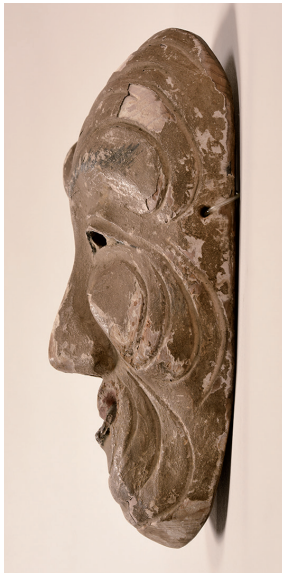
14  
曲見



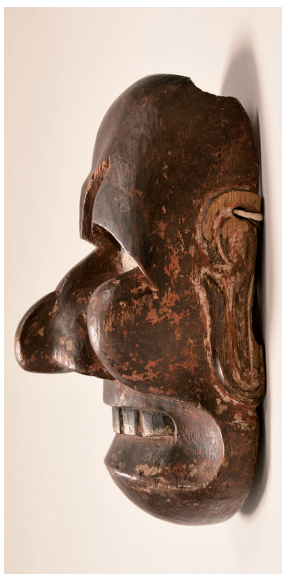
15  
中将



16  
平太



17  
祖父



18  
武悪



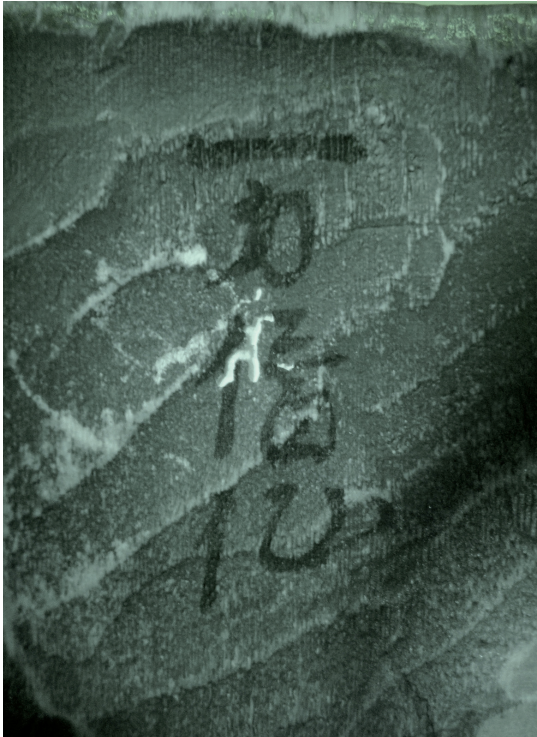
19  
乙



20  
狐



21  
面箱



面裏額部墨書「万借作」



1 翁（白色尉）



面裏眉間部墨書「康吉」



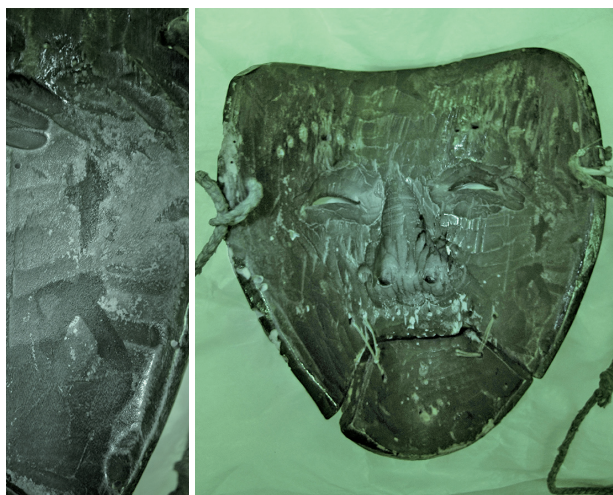
5 三番叟（黒色尉）





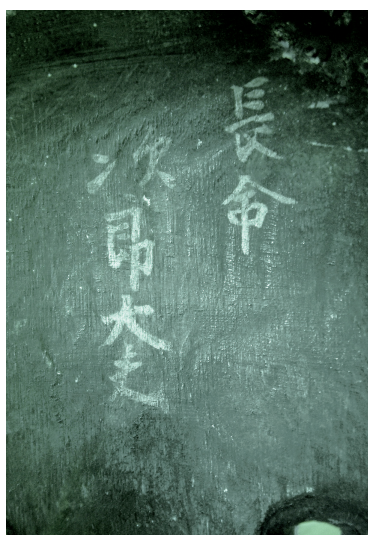
8  
尉

面裏右頬部墨書  
「八」

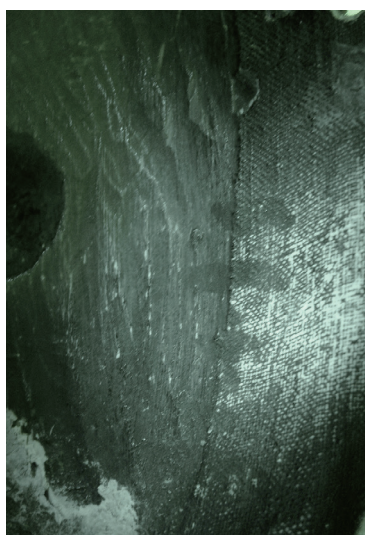


6  
三番叟（黒色尉）

面裏右頬部墨書  
「十五」



面裏額部金泥銘  
「長命／次郎大夫」



面裏右頬部墨書「二十〇」



9  
尉



面裏右頬部墨書「九」「花押」

12  
般若



面裏右頬部墨書「二十四」

11  
怪士



紙縫墨書「能面／第壹號」

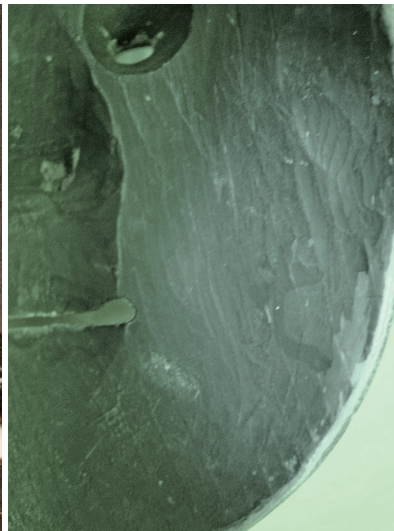
10  
癡見



面裏刻銘「千草左衛門大夫作／応永／廿季／二月／廿一日」



面裏眉間部刻銘「六」



面裏右頬部墨書「七」



13  
小面



面裏額部墨書「(花押)」



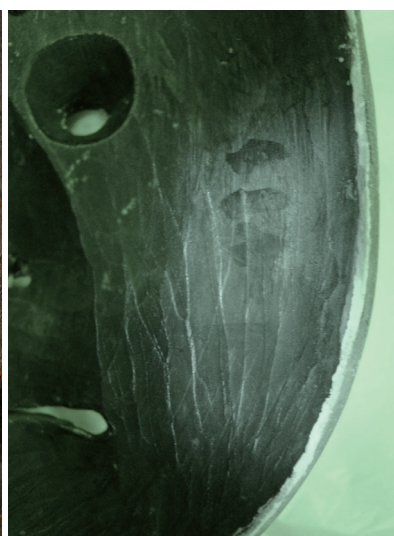
面裏右頬部墨書「十二」



15  
中将



面裏眉間部刻銘「六」



面裏右頬部墨書「二十一」



16  
平太



面裏右頬部墨書「十四」



面裏額部墨書「社」



17  
祖父



面裏左頬部墨書「(花押)」



面裏右頬部墨書「一十三」



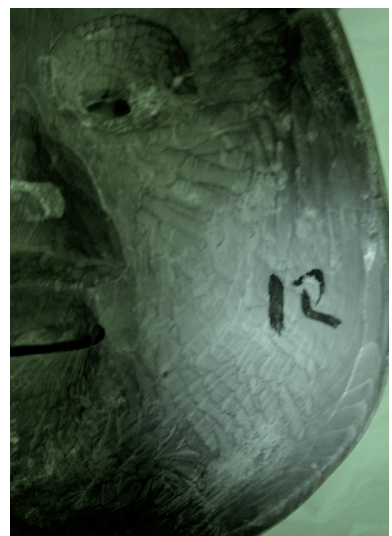
18  
武悪



面裏右頬部墨書「十八」



20  
狐



面裏右頬部墨書「四」

19  
乙